



もくじ	
広重の人物東海道にみる季節 藤沢に雪がふる	P 1
広重と東海道シリーズ	P 2
浮世絵こぼれ話 19「浮世絵で見る冬の装い」／浮世場なれ	P 3
二代目オニカゲ学芸員のページ⑫ 人物東海道のぼかし表現 「一文字ぼかし」／編集後記	P 4

## 広重の人物東海道にみる季節 藤沢に雪がふる

会期

2024年3月5日(火)～5月6日(月/休)

歌川広重(1797-1858)は、東海道の<sup>そろいもの</sup>揃物(シリーズ)を20種余り描きました。当時の旅ブームもあり、「東海道五拾三次之内」(保永堂版)<sup>とうかいどう ごじゅうさんつぎのうち ほえいどうばん</sup>が大ヒットしたことで、その後多くの版元たちから広重に東海道を主題にした揃物の制作依頼が次々にあったためです。広重の人々を飽きさせない創意あふれる工夫もあって、多様な東海道の揃物が続々と刊行されました。

今回の展示では、各宿場の風景とともに細やかな人物描写が特徴の「五十三次」(通称「人物東海道」)を中心に、広重が描く当時の旅の様子、風物や季節を紹介します。「人物東海道」から広重が描く当時の情景をお楽しみください。



【図1】歌川広重「五十三次 石葉師」



【図2】歌川広重「五十三次 藤沢」



【図3】歌川広重「五十三次 戸塚」

# 広重と東海道シリーズ

歌川広重が浮世絵師の世界に入った文化8年(1811)頃は、<sup>うたがわとよくに</sup>歌川豊国(1769-1825)が美人画と役者絵で人気を得ていました。広重は人気絵師であった豊国に入門を希望しますが、弟子の数が多かったことから、断られてしまいます。そのため、<sup>うたがわとよはる</sup>豊国と同じく歌川豊春(1735-1814)に学んだ<sup>うたがわとよひろ</sup>歌川豊広(?-1830)に入門します。豊広は風景画を得意とする絵師でもあり、東海道を題材とした作品も発表していました。豊広のもとで広重は美人画や役者絵を描くとともに風景画の基礎を身近に学ぶことができたとされます。また、<sup>じょしょうてき</sup>広重の抒情的で落ち着いた画風は、師である豊広の画風の影響を見ることが出来ます。豊広が亡くなったあと、広重は本格的に風景画へと注力しはじめ、江戸の名所を描いた<sup>とうとめいしょ</sup>「東都名所」と題する揃物などを発表します。



【図1】歌川広重「東海道五拾三次之内 藤沢」(保永堂版)

天保4年(1833)頃に発表された東海道の各宿場の風景を描いた「東海道五拾三次之内」(保永堂版)は、広重の出世作となり人々の間で人気を得ます。ヒットの背景には、作品発表時に大衆の間で旅ブームが起こっていたことに加え、景観のリアリティにこだわりながらも、各宿場の風俗から季節や天候を情緒豊かに描いた広重の独創性がありました。

「東海道五拾三次之内」(保永堂版)を刊行した19年後、嘉永5年(1852)に発表されたのが「五十三次」(通称「人物東海道」)です。各宿場の風景のみならず、旅人や宿場にいる人々の様子、風俗も描かれました。【図2】【図3】は広重が描いた東海道の宿場、<sup>ごゆ</sup>御油です。各宿場には客を自分の宿に勧誘する客引きの「留女」と呼ばれる女性たちがおり、次の宿場である赤坂が近いこともあって、特に御油は強引に客引きをする留女がいることで有名な宿場でした。【図2】の「東海道五十三次之内」(蔦屋版東海道)では宿場全体の風景を描いていますが、【図3】の「五十三次」(通称「人物東海道」)では宿場の風景とともに客と留女を大きく描いています。同じ宿場でも、広重の創意工夫によって異なる表現がされ、歌川広重といえば東海道シリーズの絵師というイメージを人々に印象づけました。



【図2】歌川広重「東海道 三十五 五十三次之内 御油」(蔦屋版東海道)



【図3】歌川広重「五十三次 御油」

## 浮世絵で見る冬の装い

歌川広重の「五十三次 藤沢」は藤沢を描いた浮世絵には珍しく、冬景色の遊行寺付近が描かれています。雪の中、遊行寺橋の欄干をバックに歩く二人の女性の装いに注目し、江戸の冬のファッションをご紹介します。

まずは作品の左側の女性に注目していきましょう。現代の和装でも使用されている冬の防寒着「裕羽織」に身を包んでいます。裏地を仕立ててあるのが特徴の裕羽織を、広重は赤色の裏地で表現しています。表地には「常に変化する」とい

う意味を持った太極図と「子孫繁栄・商売繁盛」などの意味を持った瓢箪が格子模様のように交互にあしらわれています。裕羽織の下には松葉柄の小袖が描かれています。松葉柄は2本の線が合わさったデザインで冬の文様として着られることが多いのですが、左の女性の小袖のように覆いかぶさる量の松葉のデザインを「松葉散らし」と呼び、総柄の場合、現代では通年着ることのできる柄とされています。

作品右側の女性は江戸町人のファッションとして代表的な縞模様おこそずの小袖をはおり、御高祖頭巾おこそずで頭を覆っています。顔のみが見えるくらいにしっかりと布を巻き付けて暖をとっています。

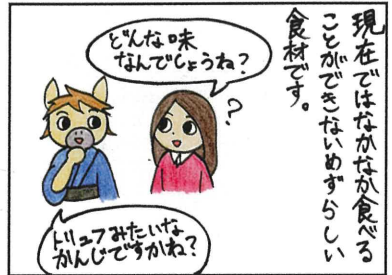
また、女性の足元に注目すると、左側の女性が足袋げたと下駄を履いているのに対し、右側の女性は裸足で下駄を履いています。歯の高い下駄は雨や雪の日に履かれていました。裸足で下駄



【図2】歌川広重「五十三次 藤沢」より、足元の抜粋



【図1】歌川広重「五十三次 藤沢」



を履く行為は流行の一環だとされ、遊女を中心に町人の女性にも広まったファッションの一例です。

幾度も「奢侈禁止令」が出された江戸時代において、町人が身にまとえる色や素材に制限がかかりました。文様に工夫を凝らし、着こなしや合わせ方でファッションを楽しみながら実用性と融合しました。江戸の人々にとって冬の装いも一つの自己表現だったのかもしれませんが。



## 人物東海道のぼかし表現「一文字ぼかし」

いちもんじ

### 一文字ぼかし



歌川広重「五十三次 亀山」

今回は、人物東海道の「ぼかし」について紹介します。「ぼかし」とは、江戸後期に発達した技法で、色の濃淡によって境界を曖昧にする表現方法です。いわゆるグラデーションですね。ぼかす版面を濡らしたぼかし雑巾で拭き、水気を含ませたところに刷毛で絵具をぬり、摺り上げます。ぼかし技法のうち、画面の上辺、あるいは下辺を真横にぼかしたものを、「一文字ぼかし」といいます。

「五十三次 亀山」の背景は「地つぶ潰し」と呼ばれる単色で背景を摺る技法が用いられ、淡い墨色に摺られていますが、上辺には墨色の一文字ぼかしが見られます。あえて墨色で摺ることで、雨雲に覆われた暗さを表しています。

ぼかし技法を用いることで、空間的な奥行きや季節感、天候、朝や夕方といった時刻が感じられるようになりました。人物東海道に

おいても、四季の移り変わりや雨や雪といった天候などが見事に表現され、名所絵などの浮世絵の表現の拡大に大きな役割を果たしました。

### 編集後記

今では風景画の代表的な存在である広重ですが、彼の名前が有名になるのは歌川豊広に弟子入りしてから20年後の35歳頃といわれています。何事も成し遂げるには時間がかかると思いますが、広重にならってこれからも浮世絵と藤沢の郷土歴史の魅力をお伝えする努力を続けてまいります。

### 編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】 [藤沢市藤澤浮世絵館](#) で検索🔍

